



Title	助詞「へ」の上接名詞句についての一考察：場所から人物への拡張
Author(s)	黒星， 淑子
Citation	待兼山論叢．文学篇．2022, 56, p. 19-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94863
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

助詞「へ」の上接名詞句についての一考察

—場所から人物への拡張—

黒 星 淑 子

キーワード：助詞「へ」／人物を示す語／建造物接続形／場所を示す語／婉曲表現

1. はじめに

現代日本語における「へ」は、その目標対象として「京都へ行く」「友人へ知らせる」などのように、場所を示す語と人物を示す語とのいずれもとることができる。ところが奈良時代ではその上接名詞句に人物を示す語を取る用例は確認されないなど、時代によって異なる点が認められる。しかし、これまでの通史的研究は係る動詞を中心としたもので、上接名詞句については明らかにされていない問題も残されている。

本稿でことに着目したいのは、場所性名詞と婉曲表現との関わりである。平安時代以降、係る動詞に発話動詞が加わることによって「へ」の上接名詞句が文脈的には人を表すようになったのであるが、その場合直ちに場所性が失われて人物そのものを表す名詞句が立つようになった訳ではなく、一時的には場所の一種である建物を表す名詞句が置かれるという現象が見える。このことと関連して、発話動詞の聞き手を表す名詞句における「へ」と「に」の違いで係る動詞の待遇表現に着目した場合、明らかに「へ」が主語下位待遇の表現に偏るという現象が見えるのであるが、この現象がいかなる理由によるものなのか、未だ明らかではない。本稿では、人物を示す語を取るまでの「へ」の通史的過程を明らかにすることを目的として上接名詞句と係る動詞との関係に目を向けつつ調査を行い、待遇表現との関与について考察する。

2. 先行研究

「へ」の通史的拡張過程については、石垣謙二（1955）、青木伶子（1956）、此島正年（1966）の研究によって明らかにされている。人物を示す語を中心として論じたものは、キリシタン資料を対象とした白井純（1997）、天草版平家物語における「へ」と「に」について論じた江口正弘（2000）（2003）が挙げられる。中世期の和文資料を対象とした黒星淑子（1997）では、「へ」の係る動詞が発話動詞の場合、上接名詞句が人物を示す語を取るものは高位人物に限られることを指摘し、「へ」と待遇表現との関係を推測する。しかし、そこに場所を示す語からの拡張過程や場所を示す語との関係など通史的観点における記述は見られない。

本稿は覚一本平家物語を用いて、「へ」が人物を示す語を取るに至るまでの通史的拡張過程を明らかにし、「へ」と待遇表現との関係について記述することを目的とする。同資料は黒星淑子（1997）も対象資料に加えているが、本稿ではそこで言及がない点を含めた上で調査を行う。

その手順は以下の様に行う。

- ・発話動詞を取る「へ」と「に」の比較調査を行い、「に」とは異なる「へ」の特徴的傾向を明らかにする。
- ・「へ」が人物を示す語を取るに至るまでの通史的拡張過程を辿る。
- ・建造物を示す語と敬称として認められる語との関係を検討する。

3. 調査方法

調査は「へ」と「に」との対比を中心に行う。それは「に」では始めから人物を示す名詞句を受ける用法が確立されていたのに対し、「へ」は場所名詞から人名詞へと拡張する過程をもつ。このような違いがある反面、そこには「へ」と「に」の共存状況も見られる。共存する両者の比較調査を行うこ

とは「へ」の用法を明らかにする上で有益だと考えたためである。

3.1 用例の抽出

調査資料は、主に日本古典文学大系所収の覚一本平家物語（1985-1986、第27刷）である。その理由は、「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過渡期にあたる鎌倉期の資料であり、登場人物の身分・地位の記述もあるため為手と受け手の上下関係も把握しやすいと考えられたためである。ことに覚一本は鎌倉期の語り系諸本とされる中でも受け手への会話表現を多く含むものであったため、人物を示す語を上接名詞句とした格助詞が表れやすく、調査可能な分量が得られると考えたためである。

検索には金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』（1973）を使用した。発話動詞は「へ」の係る動詞として出現した動詞のみとした。発話動詞としての判別は基本的に『日本古典対照分類語彙表』（2014）における言語活動動詞の範疇とする。通史的調査^{注1}には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ）を用いる。検索対象は奈良時代編－万葉集、平安時代編－仮名文学（古今和歌集を除く）、鎌倉時代編－説話・随筆、日記・紀行とする。係る動詞に複合形をとる用例は対象外とする。それは複合形動詞の場合、動詞の意義を明確に把握することは難しいと判断したためである。平家物語を除き、万葉集及び平安時代資料と鎌倉時代資料は、新編日本古典文学全集（小学館）所収の各資料とする。

3.2 分類の基準と結果

平家物語の調査に先立ち、以下3点の分類と判別を行う。

- a. 上接名詞句における分類 一場所を示す語と人物を示す語—
- b. 係る動詞（発話動詞）における分類 一尊敬語と謙譲語—
- c. 身分・地位における基準 一高位人物としての判別基準—

3.2.1 a 上接名詞句

覚一本平家物語では「へ」の上接名詞句として「小松殿」「宮の御方」等

の様に人物と場所とのいずれにも用いられる語が存在する。そのような語の分類は以下の基準により行う。(用例の所在は覚一本平家物語では上冊・下冊の区別とページ数、他の資料では資料名とページ数をカッコ内に示す。)

a-1 人物を示す語としての分類基準

- ・ 人に対して行われる動作・行為を表す動詞や発話動詞を取る用例。
- ・ 主従関係や親族関係など、人間関係を示す用例。

a-2 場所を示す語としての分類基準

- ・ 係る動詞として「行く」「帰る」のような移動動詞、及び存在動詞を取る用例の上接名詞句。

更に、上記の分類によって得られた結果が異例ではないことを確認すべく全体における出現率の調査を行う。解釈は日本古典文学大系平家物語における頭注に従うが、一部には参考として注釈書を用いる。通史的資料の解釈は新編日本古典文学全集の各資料中の解釈及び頭注に従うものとする。

平家物語にて抽出・分類した語について、人物を示す語として用いられた用例数と全用例中の出現率を調査した結果は以下の通りである。

表1 覚一本平家物語における「殿」「御方」「女院」「宮」「殿」の分類

	人物	建造物	方向	計
御方	21 (87 %)	1	2	24
女院	57 (100 %)	0	0	57
宮	72 (86 %)	11	0	83
殿	29 (100 %)	0	0	29
殿(接尾語)	611 (87 %)	84	0	695

表の説明：「人物」は人物を示す語、「建造物」は建造物を示す語、「方向」は方向を示す語を指す。カッコ内は人物として用いられた用例の出現率(小数点第三位以下切捨て)を表わす。

3.2.2 b 係る動詞

係る動詞(発話動詞)は尊敬語と謙譲語との2分類とする。

【謙譲語】申す 申し上ぐ 申し合はす 申し置く 伺ひ申す 奏聞す 奏す／【尊敬語】仰す 仰せ合はす 仰せ付く 宣ふ 宣ひ合はす

3.2.3 c 身分・地位の高低の判別と待遇表現との関り

高位人物としての判断基準

人物の身分・地位が高位であるか否かの判別は、西田直敏（1978）と西田直敏（1990）に基づき行う。それは両書が本調査と同じテキスト（日本古典文学大系『平家物語』）を用いたものであることによる。西田直敏（1978、pp.186-233）では平家物語における敬語表現の様相、西田直敏（1990、pp.288-299）では平家物語における敬語として詞・辞の分類の許に「尊敬表現」「謙譲表現」「自敬表現」について論じられている。そこで示された敬語表現におけるよる三分類と敬語を以下に示す。（第三グループは敬語が用いられない人物を対象としたものであるため省略した。）

【第一グループ】（貴族社会の支配者層）天皇・院（上皇・法皇）・女院・后・宮など皇族と摂政・関白／【第二グループ】大臣と大納言・中納言・言参議および三位以上の貴族／【対象代名詞】君 殿 貴殿 御方 御房 御辺 わ殿／【敬称の接尾語】君 公 殿 卿 御前 御方 御房／【複数の接尾語】たち（尊敬）

4. 覚一本平家物語

4.1 「へ」と「に」の相違点

4.1.1 概観

発話動詞を取る用例を対象として「へ」と「に」の比較を行った場合、その上接名詞句と係る動詞に異なる点が認められる。以下に挙げた表は、その違いを数値的に纏めたものである。

表2 上接名詞句

助詞	場所を示す語	人物を示す語	
		建造物 接続	建造物 非・接続
へ	17	14	2
に	1	12	59

表3 発話動詞

	尊敬語	謙譲語
へ	4	29
に	43	29

表2は「へ」と「に」の上接名詞句を人物と場所とに分け、更に人物を示す語を建造物の接続した名詞句と接続のないものに分けた数値を「建造物接続」と「建造物 非・接続」として示したものである。(以下、「建造物接続形」は「殿」など建造物を接続した形を指すものとする。)表によると、「へ」は場所を示す語と人物を示す語とのいずれにも偏りなく用いられるが、人物を示す語の場合には建造物の接続形へ偏る傾向にあることが分かる。

表3は係る動詞を尊敬語と謙譲語とに分類した用例数となるが、ここでは「へ」が謙譲語に偏る傾向が見て取れる。このように数値的に偏りが見られた用例を問題点として捉え、次節より考察を進めていく。

調査対象としての問題点

- ・「へ」は、場所を示す語と人物を示す語とのいずれにも偏りなく用いられる。
- ・上接名詞句において人物を示す語の場合、「へ」では建造物を接続した名詞句への偏りが認められる。
- ・係る動詞を尊敬語と謙譲語とに分類した場合、「へ」では謙譲語への偏りが見られる。

4.1.2 場所を示す語

まず、場所を示す語として分類した上接名詞句を以下に挙げる。

「へ」の上接名詞句　都　大宰府　関東　鎌倉　福原　内裏
院御所　衆徒の御中　平大納言のもと

「に」の上接名詞句 安芸

係る動詞が発話動詞であることから考えると、上接名詞句には受け手としての人物が想定される。ところが「に」の用例では具体例を見ても人物に繋がる表現を確認することはできない。(漢字表記は可能な範囲で常用漢字に改めて記す。)

- (1) 入道相国夫婦共に、「あはれ、いかにもして皇子御誕生あれかし。
位につけ奉り、外祖父、外祖母とあふがれん」とぞねがはれける。わ

が아가め奉る安芸の厳島に申さんとて、月まうでを始て、祈り申されければ、中宮やがて御懷妊あ（ッ）て、思ひのごとく皇子にてましましけるこそ目出たけれ。（上223）

上記のように具体例をみると、「に」の用例で表されるのは入道相国夫婦の土地信仰であり、祈り申す対象は「安芸の厳島」という場所そのものとなっていることが分かる。ところが「へ」の用例では土地信仰のような表現は見出せず、いずれにおいても受け手として人物を想定することが可能な用例となっている。それは、文脈において発話後に人物の反応や周囲の状況が記述されていることから判断される。以下は全用例を纏めたものとなる。

表4 上接名詞句として場所を示す語を取る用例 発話後の状況

	上接名詞句	反応行動の主体人物	発話後の状況と反応行動	用例所在
「へ」	安芸	——	——	上223
	衆徒の御中	神人宮司	しばらくゆらへたり	上135
	衆徒の御中	大衆	谷々へおり、坊々へぞ入にけり	上138
	都	前右大将宗盛卿	大にさはいで、入道相国おりふし福原におはしけるに此よし申されたりければ	上284
	福原	わかき公卿殿上人	「あはれ、とく事のいでよかし。打手にむかほう」などいふ	上344
	都	平家の人々	大にさはがれけり	上426
	都	大臣以下残り留まり給ふ一門の人々	いさみ悦事なのめならず	下97
	大宰府	平大納言時忠卿	惟村にいでむかつてのたまひける	下132
	関東	兵衛佐	大におどろき	下161
	都	鼓判官	陳ぜんとて夜を昼に次いで馳下る	下161
	院御所	かたはらの公卿殿上人 つばねの女房達	「…是らをあんだけられんはくちをしかるべし」と面々に申されければ	下184
	平大納言の許	平大納言時忠卿始めとして 平家一門の公卿殿上人	寄り合ひ給ひて、御請文のおもむき僉議せらる	下249
	院の御所	院中の上下	騒動す	下343
	院の御所	——	「只法にまかせて追出せよ」と宣旨下さる	上122
	都	——	やがて打手を指し遣はす	上424
	院の御所	——	「頼朝に見せて後こそ…」と仰せければ	下254
	関東	——	「何さまにも見参してこそともかうもはからはめ」との給ひければ	下416
	鎌倉	——	「何さまにも見参してこそともかうもはからはめ」との給ひければ	下416

用例の具体例（一部）に発話後の状況を示した部分に波線を臥して示す。

- (2) 此由都へ申たりければ、大臣殿以下残りとゞまり給ふ一門の人々い
さみ悦事なのめならず。 (下 67)

- (3) 大臣殿・平大納言のもとへは院宣のおもむきを申給ふ。…（中略）
 さる程に、平大納言時忠卿をはじめとして、平家一門の公卿殿上人り
あひ給ひて、御請文のおもむき僉議せらる。 (下 249)

- (4) 此由を社家より内裏へ奏聞しければ、「只法にまかせて追出せよ」
と宣旨を下さる。 (上 122)

- (5) 兵衛佐大におどろき、「…（略）知康においては既に違勅の者なり。
 めしつかはせ給はば、かさねて御大事いでき候なむず」と、宮こへ早
 馬をも（ッ）て申されければ、鼓判官陳ぜんとて、夜を日についで馳
下る。 (下 161)

(5) は、知康の所業を知った兵衛佐が「知康をお召し使いになっておられると、重ねて一大事が出来いたすことになろう」と「都」へ申し送り、それを知った知康が自身の弁明のために関東へ馳せ下る場面である。ここで「申す」後の反応として表現されたのは、受け手によるものではなく、話題の当事者である知康自身の「夜を日についで馳せ下る」という行動である。しかし後の状況として「後には稲荷の辺なる所に、命ばかりいきてすごしけるとぞ聞こえし。」と、知康は人目を避けて稲荷の辺りに住んだことが記述される。これにより (5)「都へ申す」は、都に在住する法皇や貴族に向けた発話表現として捉えた。他の用例は、全て表に示した通り上接名詞句の場所と関係する人物の反応が表される。このことを考え合わせると、受け手として人物が想定される場合、上接名詞句として場所を示す語を取る用例は「へ」の一特徴として捉えられる。

4.1.3 人物を示す語

「へ」の用例において人物を示す語と判断したものは以下の名詞句である。

【人物を示す語と判断した「へ」の全用例】

法皇 殿下 大臣殿 小松殿 鳥羽殿 大納言佐殿 法性寺殿
鎌倉殿 宮の御方 其御方 平家 公家 平家の君達のかたがた

用例を通覧して、まず気付くのは人の名前など直接人物を指し示す語が確認されないという点である。表3に示したように、「へ」では人物を示す語に分類した名詞句16例中、14例（約87.5%）が建造物を示す語の接続形を取る。建造物の接続が無い用例であっても、「へ」では直接的に人物を指し示す名詞句は見られない。

(6) 出家の志の候よし、便に付て小松殿へ申されければ、此由法皇へ伺申て御免ありけり。 (上187)

(7) 荘園私領一所も相違あるべからず、并に大納言になしかへさるべきよし、法皇へ申されけり。 (下289)

一方「に」では、建造物の接続を取る名詞句は全71例中の12例（約16.9%）に止まる。また、建造物の接続がない名詞句には個人氏名や「人」を接続した用例が含まれる。

(8) 土のすこしたかき所に少将袖かきあはせ、いきたる人に物を申やうに、泣く々申されけるは (上228)

(9) 鎌倉殿より頻に申されければ、安判官資兼に仰て召捕（ッ）て関東へぞ下されける。 (下422)

上記のように具体例を見ると、名詞句そのものにも違いが認められる。この違いを見ても「へ」の建造物接続形への偏りは注目すべき点だと考える。

4.1.4 係る動詞

係る動詞において「へ」では謙譲語への偏りが見られることは既に表3に示した通りであるが、更に少数の尊敬語に目を向けると、「へ」と「に」とでは上接名詞句において違いが認められるのである。上接名詞句に限って見るならば、「へ」では建造物と方向を示す語の接続形に限られており、そこに摂政・関白より身分の低い人物は含まれない。

(10) 建礼門院のいまだ中宮にて在ましける時なり。其御方へ、「さ様の

いろしたる御衣や候」と仰ければ (上 391)

- (11) 其時の殿下、法性寺殿へ仰合られければ、御領あまたたびな (ン)
 どして、めしつかはれける程に (上 420)

ところが一方の尊敬語をとる「に」の用例では、建造物の接続形は見られず、個人名や役職名などの広い範囲の人物を指し示す名詞句を取る。中にはいやしめの接尾語「ども」を伴う用例も含まれる。

- (12) 此事、新大納言成親卿已下近習の人々に仰合られて、山せめらる
 べしと聞えしかば (上 150)

- (13) 太政入道、瀬尾太郎兼康に仰て、備中国へぞ下されける。
 (上 184)

以上、数値比をもとに「へ」の上接名詞句と係る動詞における具体例を検討してきた。結果として上接名詞句における建造物の接続形を取るか否かという点において違いがあることが明らかになった。とすると次に疑問となるのが、この違いが果たして有意差として認められるのかという点である。そこでこの点を明らかにすべく検定^{注2}を試みたところ、建造物の接続と非接続の違いにおいて有意差が認められた ($P < 0.01$)。よって「へ」の用例における建造物接続形への偏りと謙譲語へ偏りは、「に」との相違点として等しく有意差が認められるものとして考える。

では、ここで得られた結果は先行研究における指摘と如何に関わるのか。次節ではこの点を併せて検討する。

4.2 待遇表現との関与

本節では、発話動詞が用いられた「へ」の受け手人物は高位人物限定であるとの指摘について検討する。まず発話動詞を取る全用例を以下に挙げる。

表5 覺一本平家物語における「へ」と「に」の上接名詞句（人物を示す語）

「へ」	《地位・役職・身分》（全16例） 法皇2 殿下 大臣殿 北大納言佐殿 法性寺殿 鳥羽殿 鎌倉殿 小松殿2 八条女院 宮の御方 其御方 平家の君達の方々 平家 公家
「に」	《地位・役職・身分》（全50例） 入道殿 小松殿 大臣殿2 鎌倉殿2 三位殿 女院 八条女院 九郎御曹司2 公家 入道相国2 宰相2 判官 平大納言 大将 座主 祇園別当 浄憲法印 仏所の法印 李広と云將軍 山の座主・寺の長吏 明雲大僧正 高僧貴僧2 大進僧正覺宗 太政大臣・左右の大臣・内大臣・堀河大納言忠親卿 諸卿 大仏の聖俊乗坊 山門の大衆2 君 母上3 乳母の女房2 二人の女房 武士2 守護の武士2 侍共3 東国の軍兵ども 《役職+人名》（全6例） 権大僧都澄憲 飛驒守景家・築後守貞能 権少輔頼春 左少弁兼光 小胡麻郡司織維 岡辺権守泰綱 《人名》（全7例） 中原範貞 土肥次郎 瀬尾太郎兼康 安判官資兼 伊豆藏人大夫頼兼 北條 木曾 《その他》（全8例） 侍一人 一定仕らんずる仁 他人 近習人々 才人等 人々2 いきたる人

表を通覧すると明らかなように「へ」では平氏や源氏以上の高い地位にある人物に限られるが、「に」では皇族から官位のない兵士に至るまでの広範囲の人物となっており制限は見られない。それは複数を示す用例にも同様の傾向が窺える。平氏一族を示す「平家の君達」は「へ」を取り、地位のない東国武士である「東国の軍兵」は、「に」を取る用例として出現するのである。

(14) 大臣殿は安芸右馬助能行を使者で、平家の君達のかたへ、「九郎義経こそ（略）」との給ひければ、みな辞し申されけり。（下195）

(15) 判官宿所に帰（ッ）て、東国の軍兵どもにの給ひけるは、「義経、鎌倉殿の御代官として（中略）これよりかへらるべし」（下302）

このように身分・地位の観点からすると、「へ」の受け手人物が高位の人物に限られるという特徴的傾向は否定されないことになり、建造物接続形と高位人物との関係が疑問となる。そこで改めて上記の人物を高位人物として判断した基準そのものに目を向けるならば、高位人物とした判断の基準と建造物接続形とには一つの共通点があることに気づく。高位人物としての判断は先行研究によるが、そこで挙げられた最高位の人物と敬称の殆どに建造物や方向を示す語が確認されるのである。

覚一本平家物語において確認された最高位人物を表わす語と敬称

【最高位の人物】天皇・院（上皇・法皇） 女院 后 宮

【敬称】 殿下 -公 -卿 -殿 -御前 -御房 -御方

平安時代^{注3}では「殿」や「君」が敬称の接尾辞として使用されていたことは既に明らかにされているが、その段階では実名敬避の用法として住居名など様々な間接的な婉曲の呼称が発達したということである。とすると次に疑問となるのが、建造物を示す語と敬称との関係である。よって次節では「へ」の上接名詞句を中心とした通史的拡張過程を辿り、その上で建造物を示す語の位置づけを試みる。

5. 「へ」の通史的用例における建造物接続形

平安時代編の検索対象は竹取物語、伊勢物語、土佐日記、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記とした。そのうち「殿」「宮」「院」等の建造物を接続する名詞句の用例数は以下ようになる。

表6 平安時代資料における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞 上接名詞句	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
	建造物	非・建造物	建造物	非・建造物	
竹取物語	0	0	1	9	10
伊勢物語	0	0	1	21	22
蜻蛉日記	0	0	2	37	39
落窪物語	1	0	4	10	15
枕草子	0	0	0	44	46
源氏物語	0	0	21	70	91
和泉式部日記	0	0	1	10	11
堤中納言物語	0	0	1	20	21
更級日記	0	1	0	9	10
大鏡	0	0	2	29	31

表の説明：上接名詞句の「建造物」は「殿・宮・院」、それ以外を「非・建造物」とする。係る動詞の「移動動詞・存在動詞」には「発話動詞」以外を含める。表7も同様の形式をとる。

上記の結果をもとに、Ⅰ 発話動詞の出現以前、Ⅱ 発話動詞の出現以降、Ⅲ 人物を示す語の出現、の三期に分けて述べていく。

5.1 Ⅰ 発話動詞の出現以前

奈良時代の資料に確認された「へ」では、係る動詞は「行く」「帰る」などのような移動動詞であり、その上接名詞句は国名や地名を示す語^{注4}である。

(16) あさもよし紀伊へ行く君が真土山

越ゆらむ今日そ雨な降りそね (1680)

朝裳吉 木方往君我 真土山 越濫今日曾 雨莫零根 (萬葉集394)

萬葉集における「へ」の係る動詞 (カッコ内に歌番号を記す。)

行く (280) (800) 1214) (1680) (1827) (2130) (3321) (3447) (4435)

遣る (3363) (4240) (4422) (4428) / 上る (886) (944) (4472)

越ゆ (954) (2128) (3230) / 帰る (3696) / います (3587) /

ます (3996)

鳴き渡る (271)

それが平安時代には、移動動詞と存在動詞をとる用例として建造物を示す語が確認される。発話動詞の出現以前としては、以下の用例が挙げられる。

(17) 「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし」

(竹取物語48)

(18) 花ざかりには、その宮へなむおはしましける。 (伊勢物語183)

(19) 「おなじうは、院へまゐらむ」とて、ののしりて (蜻蛉日記289)

5.2 Ⅱ 発話動詞の出現

発話動詞を取る用例は2例確認される。更級日記の用例は建造物接続ではないが、落窪物語で確認された用例は「大将」という人物を示す語に建造物を接続させた形式を取る。

《建造物接続形以外の用例》

(20) 「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、
うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに (更級日記 340)

(21) 少将、兵部のもとへ、「かの聞こえしことは今宵なり。亥の刻ばかりにおはせよ」とのたまへば、 (落窪物語 154)

《建造物の接続形》

(22) 御返事はもろともに言ひあはせて、大将殿へ聞こえたまふ。
(落窪物語 297)

上記 (22) 「大将殿」は、解釈に「左大臣道頼」とあることから、人物を示す語の用例として扱うことは可能だと考える。

5.3 Ⅲ 人物を示す語の出現

平安時代資料と同様に、鎌倉時代編において建造物の接続形が確認された資料についての調査結果を示す。

表7 鎌倉時代資料（説話・随筆）における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
	建造物	非・建造物	建造物	非・建造物	
今昔物語集	0	0	4	293	297
宇治拾遺物語	1	0	3	248	252
十訓抄	0	0	6	142	148
徒然草	0	0	4	38	42

表8 鎌倉時代資料（日記・紀行）における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
	建造物	非・建造物	建造物	非・建造物	
建礼門院右京大夫集	0	1	0	33	34
十六夜日記	0	1	2	16	19
とはずがたり	4	9	21	256	290

この段階の発話動詞を取る用例を見ると、その上接名詞句には建造物接続形以外の名詞句も確認されるようになる。

《建造物の接続形以外の用例》

(23) 阿証聖人の御もとへ申しつけて、供養せさせたまつる

(建礼門院右京大夫集115)

(24) 「変る御気色見ゆる」とて、御所へ申したれ (とはすがたり211)

(25) 「御所よりも御室へ申されて、御本坊にて、愛染の法、鳴滝、延命
供とかや、毘沙門堂の僧正、薬師の法、いづれも本坊にて行はる。

(とはすがたり251)

(26) 春宮大夫言はるれば、「東二条院より、『歌ばし召さるな』と准后
へ申されけるよし、うけたまはりし」など申して (とはすがたり414)

上記のように、とはすがたりでは地位・役職名を取る用例も確認される。発話動詞を取る場合の建造物接続形は人物を示す語として捉えるが、「御所」「御室」も人物を示す語として用いられていることが頭注によって確認される。宇治拾遺物語の「院」は第五十七代天皇の「陽成院」、とはすがたりの「御所」と「新院」は「後深草院」、「御室」は「仁和寺性助法親王」、「准后」は北山の准后「貞子」と記述がある。このように、鎌倉時代における資料において建造物接続形と建造物接続形以外の名詞句が確認されるが、いずれにおいても高位人物を示すものであった。これは鎌倉期の資料とされる覚一本平家物語との共通点と言える。

以上、「へ」の通史的な流れとして確認されたことを纏めると次のようになる。

- ・奈良時代資料では移動動詞を取る用例の上接名詞句として、場所を示す国名や地名を表す語が確認される。
 - ・平安時代資料では、移動動詞や存在動詞を取る用例に建造物の単独形—「殿」「宮」「院」—が見られる。発話動詞を取る用例としては場所を示す代名詞や形式名詞—「かしこ」「もと」—を取る用例、それに加えて人物を示す語に建造物が接続した名詞句—「大将殿」—がある。
 - ・鎌倉時代資料では「准后」のような地位・役職名が確認される。
- このように「へ」の用例を通史的に見ていくと、上接名詞句が場所を示す

語から人物を示す語への拡張には場所から人物への段階ごとの過程が見て取れる。この通史的な流れによると、建造物接続形を取る名詞句の出現は場所名詞から人名詞へと直ちに場所性が失われた名詞句へと替わるのではなく、一時的に場所性を有する建造物接続形に取って置かれたこととして捉えることができる。これは奈良時代資料における「へ」が場所を示す語であったことと考え合わせると、名詞における場所性名詞との関与が推測される。ただこの分類^{注5}について言及するには、新たに通史的調査が必要であるため本稿では可能性の指摘に留める。しかしながら「へ」が場所性を有する語と繋がりをもつ拡張した過程は明らかに言える。そして一方では婉曲用法としての建造物接続形も存在しており「へ」の係る動詞が謙譲語に偏る、という現象も見られる。これらの結果に基づき「へ」の使用が謙譲語に偏るのは、場所性と婉曲用法との重なりによる相乗効果であって、「へ」に上位待遇の意味があったのではないと考える。

6. まとめと考察

本稿では「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過程を調査してきた。その結果として、「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過程には、建造物を示す語、そして人物を示す語に建造物を接続した名詞句の存在を確認した。これは「に」は始めから人物を指す名詞句を受ける用法が確立していたのに対し、「へ」では場所名詞から人名詞へと拡張される過程をもつ。そのつなぎの部分に、建造物を示す名詞によって間接的に人を表わす建造物接続形が介在したものと考えられる。この建造物接続形というのは、主に人物を示す名詞的形態素に建造物を指し示す形態素を接続した名詞句である。その場合には、人物を示すものと場所や建造物を示すものとのいずれの概念を含むものであるのか明確に区別することができない。それゆえに建造物接続形が人物を示す語として用いられたものは間接的な婉曲表現と結びつきやすいものであったと考えたものである。

このように助詞の通史的拡張を考える際には、それが係っていく動詞の拡張を考えるだけでなく、係る動詞と上接名詞句の相関関係を明らかにすることが重要だと考える。今後は、通史的観点による更なる調査が課題である。

[注]

- 1) 通史用例における助詞「へ」の CHJ 検索条件は、「短単位検索」で「語彙素読み」が「へ」、条件の追加「品詞」の「中分類」「助詞－格助詞」とした。奈良時代資料として『歌経標式』『古事記』『日本書紀』を加える。
- 2) 統計処理は柳井久江 (2015)『エクセル統計』附録 CD『Statcel4』(オーエムエス出版)で行う。
- 3) 平安時代における敬称の接尾辞については、森野宗明 (1971) により「一君」よりも「一殿」がより丁重な言い方として好まれていたこと、そして限定されていた「一殿」呼称の一般化と拡大、それと表裏をなす「一君」呼称の縮小減退化は 11 世紀末から 12 世紀初頭にかけて著しく進展していたらしい。(p.173) ことが資料名と共に記される。五代和代 (1990) では、源氏物語を中心として中古期の「殿」と「君」の用法を明らかにしている。そこでは、殿舎を指すのが原義であった「殿」が、貴人を指したと思われる例が万葉集東歌において既に見られること、そして平安時代には殿舎とともに貴人をさす用例が広くみられるということが具体例を以て記述される。
- 4) 奈良時代資料において「へ」の上接名詞句として確認された用例を示す。[] 内は原文の表記。
『万葉集』・天[阿米] (800)・足代[安太] (1214)・唐国[韓国] (4240)・紀伊[木] (1680) (3321)・国[国] (2130)・[久尔] (3996)・桜田[櫻田] (271)・佐保の内[狭帆之内] (1827)・新羅[新羅] (3587)・筑紫[都久之] (4422)・宮[宮] (886)・都[美夜古] (4435)・[美也古] (944) (4472)・大和[倭] (105) (280) (954)・[山跡] (2128)・[夜麻登] (3363) : 『歌経標式』・水底[美那曾己] (p.263) : 『古事記』・国[玖邇] (p.267)・倭[夜麻登] (p.268) : 『日本書紀』・日本[耶魔等] (p.243)・難波[那邨婆] (p.243)
- 5) 現代語の場所性については、寺村秀夫 (1992)、田窪行則 (1984) がある。現代日本語の名詞における分類、現れる環境については、田窪 (1984) において明らかにされている。

[参考資料]

- 国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス』バージョン 2022.3 <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>
- 『日本古典対照分類語彙表』宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(編) 附録 CD (2014) 笠原書院
- 『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫(校注・訳) (2014) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『宇治拾遺物語』小林保治・増古和子(校注・訳) (2017) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『落窪物語 堤中納言物語』三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二(校注・訳) (2017) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『歌経標式 影印と注釈』沖森卓也・佐藤信・平沢竜介・八嶋泉(著) (2008) おうふう
- 『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』久保田淳(校注・訳) (2008) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『古事記 祝詞』倉野憲司・武田祐吉(校注) (1984) 日本古典文学大系、岩波書店
- 『日本書紀下』坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋(校注) (1984) 日本古典文学大系、岩波書店
- 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子(校注・訳) (2017) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『土佐日記 蜻蛉日記』菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久(校注・訳) (2015) 新編日本古典文学全集、小学館
- 『平家物語』上・下 高木一之介・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦(校注) (1985・1986) 日本古典文学大系、岩波書店
- 『平家物語全註釈』上～下二 富倉徳次郎(1987・1986・1986・1986) 角川書店
- 『平家物語総索引』金田一春彦・清水功・近藤政美(編) (1973) 学習研究社
- 『萬葉集』1～4 小島憲之・木下正俊・東野治之(校注・訳) (2006・2016・2016・2015) 新編日本古典文学全集、小学館

[参考文献]

- 青木伶子(1956)「「へ」と「に」の消長」『国語学』24、pp.107-120、日本語学会
- 石垣謙二(1955)「助詞「へ」の通時的考察」『助詞の歴史的研究』pp.55-80、岩波書店
- 江口正弘(2000)「『天草版平家物語』の「へ」と「に」について」『尚絅大学研究紀要』23、pp.73-85、(同(2003)『語意の解釈がゆれる中古語と中世語の考察』pp.198-252、所収笠間書院)
- 大久保恵子(2018)『路女の日記における敬称の使い方―「殿」を中心に―』近代語研究第二十集、pp.301-319、武蔵野書院

- 蒲原淑子(1991)「格助詞「へ」と「に」の消長についての一考察—『平家物語』を中心として—」国語学会発表要旨『国語学』166、p.39
- 黒星淑子(1997)「〈人物〉を受ける「へ」について」『語文研究』84、pp.39-56、九州大学国語国文研究室
- 五島和代(1990)「源氏物語の「殿」と「君」」『北九州大学文学部紀要』42、pp.21-45、北九州大学文学部
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究』pp.83-100、桜楓社
- 白井純(1997)「キリシタン文献における「に」格と「へ」格—待遇表現の標識について—」『国語国文研究』106、pp.50-6、北海道大学国語国文学会
- 田窪行則(1984)「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12、pp.89-115、大阪外国語大学研究留学生別科
- 寺村秀夫(1992)『『ところ』の意味と機能』『寺村秀夫論文集Ⅰ』pp.321-336、くろしお出版
- 森野宗明(1971)「古代の敬語Ⅱ」pp.165-180、辻村敏樹編『講座国語史 第5巻 敬語史』大修館書店
- 西田直敏(1978)『平家物語の文体論的研究』pp.186-230、明治書院
- 西田直敏(1990)『平家物語の国語学的研究』pp.288-299、和泉書院
- (大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

A study of the noun phrases taking the particle “HE”.

—Extension from place to person—

Shoko KUROBOSHI

Abstract

The historical process associated with the extension of meaning of the Japanese particle “HE” has been clarified by previous studies. However, since the research thus far has focused on verbs related to “HE”, the development of the noun phrases taking “HE” remains unclear. The explanation of the historical shift of the noun phrases taking these particles is roughly as follows.

The original meaning of the noun phrase taking “HE” was “a place far away from the agent”, but after the Heian period, the number of examples indicating distance from the agent gradually increased. In this way, the range of noun phrases taking “HE” widened, and for verbs that expressed utterances such as “TSUGERU (tell)”, noun phrases that indicated the person to whom the action was directed came to be used. In this way, the shift from a word indicating a place to a word indicating a person is explained, but the details of the process of extension have not been clarified.

Therefore, in this paper, based on a comparison with the particle “NI”, I clarify the process of usage extension to where the noun phrase taking the particle can represent a person. In addition, medieval materials indicate that when the noun phrase taking “HE” indicates a person, the person’s social status tends to be high. This point will be examined in detail.

The study confirms that in the process of extension of the noun phrases that can take “HE”, these noun phrases include those indicating buildings such as “TONO”, “MIYA” and “IN”. These noun phrases describing buildings have two aspects: They represent a building as a place, and at the same time, they indirectly represent a person of high rank. Because of this duality, noun phrases for buildings lead to the usage of noun phrases for people, which appear to have been a factor differentiating honorific expressions.